



[趣旨説明・講演]

新しいタイプの学部 留学生の受け入れの ための日本語教育

立教大学日本語教育センター長
異文化コミュニケーション学部
異文化コミュニケーション学科教授
丸山 千歌

○小林 池田先生、ありがとうございました。

第1部では、6名の先生方にご講演いただきます。

日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授の丸山千歌先生です。観光学部教授、韓志昊先生。経済学部教授、巖成男先生。異文化コミュニケーション学部長、同学部教授の浜崎桂子先生。経営学部兼任講師の上西智子先生にご講演いただきます。休憩を挟みまして、国際化推進機構長、異文化コミュニケーション学部教授の池田伸子先生にご講演いただきます。その後、ご講演をもとに全体討議を行います。

では、講演にまいります。本シンポジウムのコーディネーターは丸山千歌先生です。丸山先生には、「新しいタイプの学部留学生の受け入れのための日本語教育」についてご講演いただきます。丸山先生、お願いいたします。

趣旨説明

○丸山 ご紹介、ありがとうございます。それでは多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学びということで、まず、簡単に、本日のこのシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。その後、新しいタイプの学部留学生の受け入れのための日本語教育についてご報告をさせていただきます。【スライド①-1】

まず簡単に趣旨説明をさせていただきます。本学、日本語教育センターでは、さまざまな事業を行っておりますが、本日私がお話しさせていただく中心は、日本語教育プログラムについてでございます。これに加えて、先ほどちょっと

ご紹介がありました短期プログラムというのがあります。これは2016年にトライアルで開始したものですけれども、立ち上げのときに一緒に栗田先生も、本日は駆けつけてくださって、ありがとうございます。また日本語相談室という、個別で相談を受け付ける事業もございます。また、スピーチコンテスト漢字検定などを行っております。

このシンポジウムは年に1回、この時期に開催をしております、今回で8回目となります。企画は、そのとき、そのとき、本学に在籍するさまざまな留学生たちをテーマにしながら、留学生と日本語教育のかかわり、それから国際化について考えてまいりました。

本学は、国際化という面では、TGU、スーパーグローバル大学創成に取り組んでおりまして、こちらのURLでござんいただけるような目標値というのを設定しております。その中で、留学生について見ていきますと、TGUが始まったのは2014年度なんですけれども、2024年を目指して、留学生を2,000人まで受け入れていこうというような動きがございます。2019年現在は、約1,000人、それと短期のプログラムの受け入れの学生を入れると、もう少しいるんじゃないかなという数字まで来ているところでございます。

この多様な受け入れの形態については、先ほど触れましたように、シンポジウムの中で、毎年テーマを決めて取り組んできております。一番初めは、特別外国人学生ですね。半年、または1年で、交換留学で本学に留学してくる学生たちをテーマにして、海外の大学の先生方にもお越しいたいてシンポジウムをいたしました。その後、正規の大学院留学生、それから2016年から始まった短期プログラムの学生たちのシンポジウム、そして昨年度は正規の学部留学生をテーマにしてシンポジウムを展開いたしました。

昨年のシンポジウムで打ち出されたのは、現行の外国人入試に加えて、これからは新しい留学生の受け入れが必要だというお話でございました。その新しい受け入れというのがどのようなものかと申しますと、9月入学を開始するということ、それから渡日をしないで選抜をして入学をしていくということ、それから、ここが肝なんですけれども、日本語力に偏らない選抜をしようという、そういったものでございました。皆様、本日は日本語に教育に関係する方々も大勢来ていただいている、よくご存じかもしれませんが、正規の学部留学生の場合は、多くの前提になっているのが高い日本語力でございます。そこを乗り越えて、新

しい留学生を受け入れていこうというような発信がされたのが昨年度でございました。

そこで、これから、先ほど副総長の池田先生からお話があったように、正規の学部留学生というのは、本学で4年間過ごして社会に巣立っていく学生たちで、しっかり教育をしていかなくはいけない学生たちでもあるんですけども、その学生たちの日本語力が多様になったときに、どういった受け入れが必要なのかということ。それからその学生たちを迎えることで、留学生が育つのはもちろんなんですけれども、大学の中の学びがより豊かになっていくとはどういうことなのかについて、本日、テーマとして取り上げたいと思ひまして、企画をいたしました。【スライド①-2】

本日の流れは、私から今、趣旨説明と、それから本学のこれからの日本語教育についてご説明をさせていただきまして、その後、各学部での取り組みになります。日本語教育のほうは日本語教育センターが頑張るんですけども、学生たちは、実際には学部にも所属をして、学部、大学に着地をして、成長していきます。その中で留学生と、それから日本人学生たちがきちんと交わりながら成長していく、そういったところに重点を置いて取り組んでいらっしゃる先生方にお話を頂戴したいと思っております。それを組み合わせる形で、池田先生から、本学の国際化、これからの方向性についてお話をさせていただきまして、そして全体でディスカッションをする。このような流れで進めていきたいと思っております。

以上が私の本日の趣旨説明でございまして、今からは、新しいタイプの学部留学生の受け入れのための日本語教育についてお話をさせていただきたいと思ひます。

先ほどお示しましたように、本学の留学生は特別外国人留学生、交換留学の学生、学部も大学院もいます。それから正規の学生ですね。大学院生と、それから学部の学生がいて、それから新しくできた短期プログラム生、こういった、大きく4つのタイプに分かれるんですけども、その学生たちと、それから日本語力の多様性について、少しお話しをさせていただきたいと思ひます。

本日お話を申し上げるのは、日本語力の多様性に関連するものです。日本語力の多様性というと、基本的にはレベルの違いを前提に考えるんですけども、実は本学では、最も留学生の多様性が見られたのが、特別外国人学生たちのところです。地域、国は、もちろんなんですけれども、学習歴ですね。どこで学んできたか、どのくらい学んできたか、どんなふうに学んできたかということ。それから

母語が漢字圏か非漢字圏かということ。それからその母語が文法構造や音ですね。どんなふうに近いのか、遠いのかといったところ、もちろん学習スタイルなど、そういったところもいろいろございまして、そういった多様な学習者要因がございまして。そういった多様性、バリエーション、バラエティが非常に飛んでいるのが特別外国人学生たちです。それから、大学院生については、研究指導の先生のご指導なさる言語によって、またさまざまだということで、ここも多様性が見られるのですけれども、その学生たちを前提に考えて、本学ではこういったプログラムを展開してきております。**【スライド①-3】**

このチャートが特外生、それから大学院正規留学生たちの日本語プログラムの全体像をざっと見た感じです。一番左に数字がゼロから8までであるのがおわかりになると思いますが、ゼロというのが、全く日本語を学んだことがない学生たち、それから8というのは、日本語能力試験のN1を取り終わっているような高い日本語力の学生たち、そういった図でございます。

初級のレベルは、まず、日本語の学習経験がない学生たちですから、きちんとセットでバランスよく学んでいくということで、初級のレベルはセットで履修する設計にしております。中級以降は、いろいろな国、地域、母語がさまざまな上に、学習経験、学習スタイルがいろいろだということがあって、学生たちの日本語力は多様です。そこで、中級からは、スキル別にして、本人の得意、不得意に合わせて履修できるような設計にしております。

先ほど学習スタイルのお話をしましたが、日本語を通して、日本語初級にも知的な学生たちが多くいますから、その学生たちの知的満足を、日本語を通して満たしていくということで、内容を重視した科目というのを演習として配置しております。また、レベルをまたいで、教えてもらったり、教えてあげたりというような関係の中で日本語力をまた高めていく、学ぶ楽しさを経験していくというようなタイプの科目も用意してございます。JLPTのN1以上の学生たちが学ぶものもたくさんございます。このように、多様性に応える観点からプログラムをつくってまいりました。

先ほどお話しした短期プログラムについては、3週間と非常に短いプログラムでなんですけれども、日本の大学生になってみる、それから立教生になってみる、そういうコンセプトで設計しました。大学で学んで立教の学生になるのであれば、そこには学部の先生たちに教えていただく機会があったり、それから立教生とき

ちんと交わる機会をつくったりといったものが出てきますので、そういった要素を十分に受け入れながら、このプログラムを作っております。本日、韓先生には、ここでの取り組みについてご紹介いただきます。**【スライド①-4】**

ここから、正規の学部の留学生の日本語力の多様性の話になります。これが本日の一番の中心テーマになんですけれども、正規の学部留学生の日本語力については、大学内での認識が少しずつ変わってきておりますので、初めにそれをちょっとご紹介したいと思います。まず、本学での話ですけれども、2015年までは、学部の留学生というのは非常に日本語がよくできると認識されていて、入学した後は、日本語母語の学生と同じ扱いで、いわゆる、学部には留学生はいないというような認識が持たれていたんですね。日本語支援がほとんど必要なくて、何の手当もなくてどんどん生き抜いていくことができる人たち、そういう認識で捉えられていました。ですので、本学ある全学共通カリキュラム、そこで外国語科目としては、日本語はもちろん配置されているんですけれども、年間で4単位、それが1つのレベルだけで展開がされていました。

それがやはり、日本留学試験が導入されたりする中で、正規の学部留学生たちの日本語力はもう少し多様なのではないかというような議論が、もちろん日本のいろいろな中であったものですが、立教大学でももちろんありました。留学生の日本語力を把握していく中で、2016年からは、入学時に日本語のプレイスメントテストを実施して、入学時の日本語力をきちんと把握することと、そこでJ6というレベルより下の学生については、必ず日本語を受けなさい。J7の学生も、もちろん日本語を推奨しますよ。でもほかの外国語も選択できます。このような仕組みをつくりました。これまでと履修単位数は変わらないんですけれども、日本語を、3つのレベルを設定するという形になりました。このタイミングから、正規の学部留学生はものすごく日本語がよくできて、入学したら何の手当も要なくてということとはちょっと違う理解がとれてきたのではないかなと思っております。**【スライド①-5】**

そして、これからなんですけれども、これからは現行の、今やっている入試に加えて、新しい受け入れが始まるというお話が昨年度ありまして、その学生たちの条件というのがこちら、先ほどご紹介した9月入学だったり、渡日をしないで選抜ができるということだったり、それから、本日の肝のところなんですけれども、日本語力に偏らない選抜を行うということでございます。

こういった条件で留学生が入ってきたときに、私たちは何が変わるのかを考える必要があります。今、学内で議論されていることは、入学後に日本語の支援が必要だという話です。今までは、入学したら何の手当も要らないという了解を、今度、考えを転換していくこととなります。また今議論されているのが、9月に入学することと関連して、半期ですね、3月までの間に日本語の学習を集中的に進めていこうといった話が出ています。これは立教大学の中では初めての取り組みとなりますので、先行例はどうか、カリキュラムはどうしたらいいのか、こういったお話になってまいります。**【スライド①-6】**

これは文科省のホームページからとってきたんですけども、日本語教育では、学部の入学前予備教育というのが、昭和29年から行われてきていて、国立大学の話ですと現在は東京外国語大学と大阪外国語大学で予備教育が行われています。大学院のレベルの予備教育というのもあって、これは昭和54年から始まっていて、現在9大学で実施されていると書いてあるんですけども、これは池田先生も、そして私も経験してきたプログラムでございます。

ですので、先ほどちょっとお話した、先行例は、カリキュラムはといったときには、日本語教育の世界では、こういった予備教育についての知見は十分にある。それをどのように学部の先生方にお伝えしていくか。それを了解いただきながら、きちんとサポートをしていただく形で、どのように展開していくか。このところがとても大切になっていくのではないかなと今考えております。**【スライド①-7】**

先ほどご紹介したホームページにあるように、一番歴史が古いのは東京外国語大学の例なんですけれども、予備教育というのは、今ご紹介したように、かなり古くから着実に行われてきた教育ですので、今現在、そんなにそれがホット 이슈として取り上げられるということはそんなにないんですね。ですけども、資料を調べていきますと、2004年に東京外国語大学でキャンパスの移転がありまして、そのときの記念シンポジウムの中で、この大学の中心的なプログラムということで、予備教育のことがきちんと報告されております。そこでそれを少しご紹介する形で、日本語の支援を学部留学生に対してどんなふうに行っているかをご紹介したいと思えます。

対象については、世界各国から来日した文科省の学部留学生です。その学生たちは、それぞれの国で、試験を受けて選考をされてきます。実際に入ってきたと

きには8割から9割の学生がほぼ未習の状態です。その学生たちに、1年間の教育を行います。教育内容としては、日本語とそれから教科の基礎を行っていると言われていて、どういったことを目標にして、その教育が行われているかということ、大学の学部入学後に、日本語による講義を聞き、必要な課題をこなす単位を取っていくことができる力をつけることと書いてありまして、こんほかには、もちろん、日本語についてはこうで、そのほか、やはりいろいろな専門に散らばっていく学生さんたちに対する教育を行っているところですので、いろいろな分野に関心を持って取り組んでいけるような教科の工夫というのもしっかりとされてきています。

非常に工夫されていると思うのが、初級から上級に対する時間の配分です。1年の間で、最初のところは日本語を重点的にやっていくのですが、だんだん、日本語学習の配分を薄くしていき、その分、教科の学習を厚くしていくというように形で設計をしているというようなことも紹介されています。**【スライド①-8】**

私たちが今、取り組もうとしていることは、立教の中で学部留学生として日本語力が多様な学生たちを受け入れる、その学生たちに対する半期の日本語教育をどうするかということです。こういった知見をもとにして、自分たちと同じところと、それから違うところ、自分たちは何を目標として今度はカリキュラムを作っていくのかということになっていくので、その移動について整理をしたいと思います。

そうしますと、スライドの表の左側が共通点ですけれども、共通点は選考ですね。日本語力によらないで選抜を行う。それから高い学力を持っている学生さんたちを選抜する。こういったところは同じですし、目標もそうだと思います。学部の学生たちとしっかりと肩を並べて学ぶことができる、課題をしっかりとこなして力を発揮していく、そういう学生さんたちになるように、日本語学習を支援していくのが目標になると思うのですが、相違点は幾つかございます。

まずは、予備教育ではないということです。立教で設計しようとしているのは、入学後の教育ですので、学生たちは大学生、学部の学生です。その学生たちの第1学期目をどう作っていくかというようなことを考える話になります。教育期間も1年か半期かとなりますと、立教の場合は半期になります。ですので、ここで考えなくてはいけないのは、入学時にいろいろな力の学生たちが入ってくるだろう。その学生たちにぴったり合った力を半期でつけさせるということになります。

ので、レベル別にクラス編成をしていくことになるかなと思います。

それからもう一つですけれども、配置大学、それから配置学部が決まっているかどうかという話でございます。先ほどご紹介した国費の学生たちの予備教育というのは、集中的に東京外国語大か大阪外国語大で展開していて、その中で、日本語の試験が何回も何回もあり、教科の試験もあるんですけども、その試験の結果がずっと蓄積されて、配置大学の決定に生かされていく。それから行きたい分野というのは学生たちそれぞれなんですけれども、どの大学のどの学部に入るかということが、その1年のパフォーマンスの結果で決まっていくというようなことなんです。立教の場合は、もう立教大学の学生で文学部に入るとか、観光学部に入るとか、経済学部に入るとか、経営学部に入るとか、異文化に入るとか、そこがもう決まっているということになります。ですので、この半期をどう使うかということ、行き先を目指していくのではなくて、いる場所が決まっている、そこにきちんと着地をする。そのために、どのように日本語支援をしていくかという、そういったことになってまいります。**【スライド①-9】**

そうなりますと、大学の学部への着地、支援に重点を置いた1年次の第1学期の全体像はどうなのか、その中の日本語教育はどうなのかということになってまいります。全体像としては、ここに書いてありますように、学部にも所属する学生としての生活を整える。そのために日本語をやったり、それから学部の学生たちが1年生に学んでいることを学んだり、日本語だけをやるわけじゃなくて、日本語は集中的にやるけれども、ほかのことも学ぶ、こういった全体像の中で、日本語の学習を考えるということになります。**【スライド①-10】**

今考えているのは、集中の日本語教育を行うということ、そしてそれが学部の学生たちが学ぶ、外国語の必修の単位の中でまかなえるような形で、ちゃんと卒業要件単位の中で位置づけられるようにして設計したいということ、それから、先ほど申し上げたように半年で、そんなに悠長にははいられませんので、半年で上げるべき成果をきちんと上げていくという意味で、レベル別のクラス編成を行うということ。もう一つは、とても大切なことなんですけれども、日本語力を高めるためのプログラムというよりは、1年の1学期目が学部で、それから大学に着地していくという、ここのところが肝になっていくので、2学期目以降も学部で安心して過ごしていける、仲間ときちんと関係をつくりながら生活していけるということがとても大切です、学部の学びというのが、こういうことだとい

うことも理解しながら進んでいく、これも大事になっていきます。ですので学部との連携やチューターの活用による専門の日本語、こういったものも大事になってくるかなと今は考えております。

このときに、これが最後のスライドで、どんな課題があるかを書いてございます。まず、日本語教育センターがやっていかななくてはいけないことは、日本語学習で成果を上げるということで、学部で学んでいくに当たって、このぐらいの日本語力は必要だというのはわかっていますので、そこに、日本語トラックに入っていく学生についてはそこまで押し上げていくことをきちんとやっていくということ、それから、立教生になって、それぞれの学部で生きていくことが前提になっているわけですから、学部としっかり連携をしていくということ。学部の学部生ですけれども、チューターが恐らく配置されることになりますから、そのチューターにもきちんと関係構築をしてもらえるような役割をきちんと果たしていくということ。

最後のところが、とても大切だと思っていることですが、日本語力が多様な留学生、つまり文化、それから社会背景が多様な留学生を迎えるということになります。彼ら彼女らを迎えることが、立教の学びの豊かさにつながっていくような実践をしていかななくてはいけないということです。そしてその実践をもって行っているときに、ああ、立教、何かすごくよくなっている、立教生の国際化に対する姿勢ですね、そういったものができているというようなことを、本人も、本人はわからないかもしれないですね、周り、それから私たちが感じていける。何か立教の教育、学びがよくなっているということを感じられるような、そういった実践をしていく、紹介をしていく、こういうことをしっかりやっていかななくてはいいかなと思っております。

最後のポイントのところが非常に大切だと思っておりますので、今日は既に実践、取り組みをされている学部の先生から、その取り組みについてご紹介いただきまして、実際に留学生、それから日本人の学生、どんなふうに学んでいるのか、どんな可能性があるのかについてお話をいただければと思っております。私からは以上になります。どうもありがとうございました。**【スライド①-11、12】**

【スライド①-1】

立教大学日本語教育センターシンポジウム2019
「多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び」

趣旨説明
＋
新しいタイプの学部留学生の受け入れのための
日本語教育

2019年12月7日

日本語教育センター長・異文化コミュニケーション学部教授
丸山千歌

【スライド①-2】

多様化する受け入れ形態

特別外国人学生 ⇒ 2013年度シンポジウム

正規大学院留学生 ⇒ 2016年度シンポジウム

短期プログラム生 ⇒ 2017年度シンポジウム

正規学部留学生 ⇒ 2018年度シンポジウム

⇒ 現行の外国人入試に加え「新しい受け入れ」へ
9月入学、渡日不要の選抜、日本語力に偏らない選抜

【スライド①-3】

本学の留学生と日本語力の多様性についての認識の変遷

<本学の留学生>

特別外国人学生(学部、大学院)

正規大学院留学生

正規学部留学生

短期プログラム生

<多様性の要因>

学習歴(どこで、どのくらい、どのように)

母語(漢字圏/非漢字圏、文法構造の近似)

学習スタイル...

【スライド①-4】

特別外国人学生および大学院正規留学生向け日本語プログラム

Levels	4 skills-integrated courses	Content based courses	Kanji classes
8			
7			
6			
5			
4			
3			
2			
1			
0			

レベル縦断型

初級レベルはセットで履修

N1以上も
ビジネス・ジャパニーズも

中級からは本人の得意不得意に合わせて履修

知的満足を日本語で

【スライド①-5】

正規学部留学生の日本語力の多様性
—これまでの認識—

<2015年度まで>

日本語がよくできる、日本語の支援が不要

日本語母語の学生と同じ

全学共通カリキュラム 言語B日本語 4単位 1レベルのみ

<2016年度以降>

日本留学試験導入以降の傾向、本学の留学生の傾向を把握

入学時 日本語PT実施 → J6以下は日本語に配置

全学共通カリキュラム 言語B日本語 4単位 3レベル設定

【スライド①-6】

正規学部留学生の日本語力の多様性
—これからは... —

現行の外国人入試に加え「新しい受け入れ」へ

9月入学、渡日不要の選抜、日本語力に偏らない選抜



先行例は？
カリキュラムは？

- ・入学後の日本語の支援が必要
- ・半期を想定

【スライド①-7】

学部入学前予備教育

日本語教育は経験有

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318579.htm

国費留学生の大学入学前予備教育は、昭和二十九年から、学部レベルは東京外国語大学附属日本語学校で、大学院レベルは大阪外国語大学留学生別科で実施してきたが、その後の国費留学生の増加に対応するため、逐次その充実を図ってきた。学部レベルは、平成三年度から大阪外国語大学でも実施することとし、留学生別科を改組して学部レベル及び大学院レベルの総合的な予備教育機関として留学生日本語教育センターを設置した。また、大学院レベルの予備教育については、昭和五十四年度に名古屋大学でも開始されたのに始まり、予備教育と専門的な教育研究との連携に配慮しつつ順次整備が進められ、現在合わせて九国立大学で実施されている。

【スライド①-8】

東京外国語大学の例

鈴木(2004)より

- ・対象... 世界各国から来日した文科省国費学部留学生
(各国で文科系、理科系各々の科目の試験結果で選考。
8～9割の者が日本語は全く未習かそれに近いレベル)
- ・教育期間... 1年間
- ・教育内容... 集中予備教育(日本語+教科の基礎)
- ・目標... 「大学学部入学後に日本語による講義を聞き、必要な課題をこなし、単位を取っていくことができる力をつける」こと
- ・初級 1日あたり90分×3コマ、週5日 14週
- 中級 1日あたり90分×2～3コマ、週5日 16週
- 上級 1日あたり90分×2コマ、週5日 8.5週

【スライド①-9】

共通点	相違点
<ul style="list-style-type: none">・選考(日本語力によらない学力に秀でている)・目標 大学学部入学後に日本語による講義を聞き、必要な課題をこなし、単位を取っていくことができる力をつける	<ul style="list-style-type: none">・入学前予備教育ではない・教育期間(1年か半期か) ⇒ 半期 入学時の日本語力に応じたクラス編成・配置大学、学部が決まっているかどうか ⇒ 決まっている。 本学への着地支援が重要

【スライド①-10】

大学・学部への着地支援に重点を置いた 集中日本語教育

<全体像>

集中日本語以外に、「やさしい日本語」による科目の履修を前提
→ 学部にも所属する学生として生活を整える。

<日本語>

- ① 集中日本語教育(100分×週10コマ 全カリ言語A,Bの10単位分)
- ② レベル別クラス編成
(英語トラック向け日本語クラス、日本語トラック向け日本語クラス)
- ③ 学部との連携・チューターの活用による「専門の日本語」

【スライド①-11】

課題

- ・日本語学習の成果
- ・学部との連携
- ・チューターとの連携
- ・日本語力が多様な留学生(文化・社会背景が多様な留学生)を迎えることが立教の学びの豊かさにつながると実感できるような実践、成果

【スライド①-12】

参考資料

大阪大学日本語日本文化教育センター「学部留学プログラム」

<http://cjlcs.osaka-u.ac.jp/ja/wp-content/uploads/2012/05/Uprogram2012.JP.pdf>

鈴木美加(2004)「国費学部留学生に対する1年の集中予備教育プログラムについて—教育プログラム内外で学生が得るもの—」、東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム

<http://academicjapanese.jp/dl/publications02/02/251-264.pdf>

東京外国語大学国費学部進学留学生予備教育プログラム

<http://www.tufts.ac.jp/common/jlc/program/index.html>

文部科学省「大学等における留学生の受け入れ体制」『学生百二十年史』

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/hakusho.htm